



伊地知文庫
文庫20
249



伊地知

筑波山は志村をさそはる
 久和歌の浦波を色や
 おちるははるくや七の持丸
 其乃れはるくはるくは
 浦の心はるくはるくは

直次百景高卒

お事なれおあぬくのれを
 ねあの子あまふの初瀬山の
 喜おあを寝るる名あつる
 ころあくもあふるふは
 去るあつる初まの屋あえを

昔の鉛巴法眼あ縁とあえ
 世中あまあつるあえ
 有るあまあつるあえ
 歌百法あつるあえ
 らあつるあつるあえ

春の流を日有之程は心は
 春の流を日有之程は心は
 春の流を日有之程は心は
 春の流を日有之程は心は
 春の流を日有之程は心は
 春の流を日有之程は心は
 春の流を日有之程は心は
 春の流を日有之程は心は
 春の流を日有之程は心は
 春の流を日有之程は心は

志付山如昔心ら如昔心ら
 志付山如昔心ら如昔心ら
 志付山如昔心ら如昔心ら
 志付山如昔心ら如昔心ら
 志付山如昔心ら如昔心ら
 志付山如昔心ら如昔心ら
 志付山如昔心ら如昔心ら
 志付山如昔心ら如昔心ら
 志付山如昔心ら如昔心ら
 志付山如昔心ら如昔心ら

尺指とて海一りのあゝるじ
ふのふれむにたゝめり
道多しおれは物語のあお
海船の海へ

拾換保

山字の音く
たゝめり
ふのふれむにたゝめり
海船の海へ

目録

目録

- 第一 連奇濫觴の事
- 第二 文字のむざむ七五七と此事
- 第三 古中今の二所同言此事
- 第四 連奇秘考古の事
- 第五 面八句の事
- 第六 連奇よ依て称号ある事
- 第七 付かゝるをとりあはるる事

- 第八 述懐れ句を意不ふ意の事
- 第九 下の句ニ又四ニ如事
- 第十 昔今句作の事
- 十一 前後句枕を意の事
- 十二 句如傍よ置きうる文字の事
- 十三 一日一季一年の句如事
- 十四 當意易妙の句如事
- 十五 詩の對句如ごとく付くる事

- 十六 名所の句を近二様如事
- 十七 人畜料本取成きうる句如事
- 十八 端的の句よ付くる句如事
- 十九 重句よ重を意を付たる事
- 二十 大物小物たぐひよ付くる事
- 廿一 前句と別のことよ取成きうる事
- 廿二 前句のみ文字付るよ並たる事
- 廿三 前句他人後句我身の事

卅四 中の七文字と臂と志をさる事
 卅五 心の景氣相は景氣氣の事
 卅六 あよといふを茶の事
 卅七 花のうに梅さうと付をさる事
 卅八 吟のうら當彦と付をさる事
 卅九 一句二句をかりてあき事
 四十 詞よとりあをずして付たる事
 卅一 わるまといふ事

卅二 前うと仕立をさる事
 卅三 景氣は景氣と付たる事
 卅四 らんは過現未の三解事
 卅五 ちよふ付をさる事
 卅六 せ名のうに名を付をさる事
 卅七 向言をさる事
 卅八 細成ことを付出さる事
 卅九 心とふく付をさる事

四十 十文字付とりよる事
 四十一 引遠付とりよる事
 四十二 首ふれとりよる事
 四十三 連奇親付疎付の事
 四十四 流随放送の四乃付様事
 四十五 真州行の三解事
 四十六 有文せ文の付解事
 四十七 急の付不急不急事

四十八 字餘りの付事
 四十九 連奇輪廻の事
 五十 折合さるる文字事
 五十一 連奇解用の事
 五十二 連奇明近事
 五十三 連奇各付の事
 五十四 付合趣向事
 五十五 付付の付々付ぬ事

五十六 付合案どをうの事

五十七 連奇の解の事

五十八 和奇連奇れ俳諧の事

五十九 連俳の案の一字遠の事

六十 案の切字連俳異なる事

六十一 連俳雑の案の有無の事

六十二 よてあり案の有無の事

六十三 連奇の奇仙式をきき事

六十四 連俳枕を兼用不の事

六十五 連俳意の句に男色有無の事

六十六 連俳字の意不意の事

六十七 俳諧俳諧の事

六十八 連奇の俳とさうの事

六十九 連奇の俳諧俳諧の連奇の事

七十 百韻連奇定式の事

七十一 名残の裏れ月と略の事

七十二 去きらひ指南奇の事

七十三 呼子多百子多等の事

七十四 産衣取用ひ居うの事

七十五 るゆありのの事

七十六 あり字の事

七十七 畢ぬ不のぬの事

七十八 けりきとり入伺の事

七十九 めるせんとりふと葉の事

八十 付合小鏡名所小鏡の事

八十一 本齊他齊の事

八十二 等類不等類の事

八十三 名月むの事

八十四 三妻七本九州十秋の事

八十五 四十四連齊の事

八十六 一抄二抄等の連奇の事

八十七 和漢連句の事

八十八 本式連歌の事

八十九 服方三才五端り字の事

九十 祭方服方三才雜の句をよむ事

九十一 むの祭方の時をよむ事

九十二 初物の裏をよむ事

九十三 秋意をよむ事

九十四 赤こしと二句をよむ事

九十五 句数つゝをよむ事

九十六 連歌至要鈔の事

九十七 連歌賦物の事

九十八 連歌會席の事

九十九 執筆用意の事

第一百 祝言連歌の事

追加

一 五音の事

一 らりるれろの文字の事

- 一 へえ急の二字指南弁此事
- 一 てにえ指南弁此事
- 一 心致傍都の脱此事
- 一 宗祇法師の脱此事
- 一 宗長法師の脱此事
- 一 連俳奇仙行の事

己上

連歌百談

○ 第一候



連奇の濫觴と人皇十二代景行天皇
 け沛字をり菟玖波集十九日景行
 天皇四十年其六月東國のみたれを
 志の多そ常陸より甲斐國沼折の
 宿よとまりて

日本武尊

擬^キ珥^ニ 比^ヒ磨^ハ 利^リ菟^ツ 玖^ク波^ハ 塙^ヲ酒^ス
氏^テ異^イ 玖^ク用^ヨ 伽^カ祢^ニ 菟^ツ祢^ニ 流^ル

人^ニく^レつ^ケや^ヤ侍^シら^ルる^ルも^モる^ルも^モる^ルも^モる^ル

燭^ノ人^ノ弁^ノの^ノ末^ヲと^ツき^テ

能^ノ伽^カ 用^ヨ 比^ヒ珥^ニ 波^ハ 菟^ツ塙^ヲ 伽^カ塙^ヲ
伽^カ 俄^カ 奈^ナ 倍^ヘ 氏^テ 用^ヨ 珥^ニ 波^ハ 虚^コ 々

け^レあ^ハる^ル連^ニ奇^ノの^ノ初^ヲと^ツ侍^シら^ルる^ルも^モる^ルも^モる^ルも^モる^ル
紀^ノよ^ク経^レせ^リと^シり^リ

○第二法

文字のぬぎ^ズみ^セみ^セと^ナり^一事^ヲ
大^ノ伴^ハ家^ノお^もり^一事^ヲなり^新撰^菟
玖^ノ波^ノの^ノ序^ハは^日其^{文字}と^みせ^にと^シり^一事^ハ
大^ノ伴^ハ家^ノお^もり^一事^ハわ^さの^祢と^シり^一事^ハ
家^持つ^連奇^と菟^玖波^集十二^は日^一
一^万系^集連^奇は

後人志す

佐保川の水とせさ入てくー田代

中納言家持

わさりねとひとりちるー

とりり

菟玖波集とらまの梓行よわさる

ゆへを間よまきかーはちよるあま

百白選とえりんと一覽よそちる

りのかり

○第三張

或人同ふていろく連弁よ右弁今弁

中比れ差別ありとやと其意ふ

い言ていろく和弁よ右弁今弁中右

の之弁ありそのころとあまにら

字と二字のさるるんどおあり右

弁の奇よと判どていろくされま

ぶ爐とりふんど忠ととととのころ
あついでてきりなすー中右所の
奇人判どていよく是といまれり
とりふんど忠いの字はお字乃中
間のろお字ぬ岩間なり二字ぬ時
下の字のゆりて墨ぬにゆりたれを
岩間の百合科と云事なりといふ判
意巧といてをさうさず今所の奇

人判どていよくこれのころにとり
ととんど忠なりえまろお字は字ある
なり依てとろくと三字とぬよ
にそとりなり今と二字のとあれは白庭
意といふ判ど方忠忠て客易
かろざる事なり連奇の三所も準か
きるにけまなるぬー古人の連奇と
いふと上下おると二人してつり

るを連奇とやとたり中比より曰
お八面は花八月の式あり今様は連奇
のつらくは異説ありてその存その席
よるんて其時の宗匠おころにすうと
べと事一にや一

○第四候

連奇秘古の事宗匠達に教訓一準
をうず其中に初人の人もをを

さううよよとべーたくとまらるうとととと
ううずよよと人よ所てんゆのまぶ一書と
にほくえたうんよりへうめととたほく
はあふべーととと業するに初人のるを
福吟たうば二の連奇ととととべー前白
と師匠よりをうけて存白とはあふ
べー或も面八白とはあふべー又二と人
己上をうべーお二お等お百韻の式と

仁孝ふべし白お出素次方に師匠は
添削とくくべし師道なき連奇と号
して功なき明善よき人よほふて徳を
きく事なり連奇とく免ごとくも
け教訓あり

○第五候

面八白此事と至要抄は案白服身三
まご一に例るといふて委しくある

せり身四白より身九白迄は白作
は指南もこれありそれより初折の裏
二三四の折は面裏の白作は折は大形と
ある述きりひきこえて其ころを
思惟とく

○第六候

連奇よりりて符号あるは事菟玖
波集十二は曰

一蓮歌百詩

煙とちりしん事と悲しき

圓嘉法師

山人の薪よきしるむの枝

くはる友よ時の人糸糸と瓜本のあさ

まどちんや侍あるとつり

又肖柏法師の紫句よ

まささうぬむやうろけふく

とつり紫むるにけい白出来てよりの

ちん肖柏と牡丹む老翁と祢せりと

しん事暮夜みんえきりまうりに

隠逸傳下巻よ牡丹むと自祢なり

とつりと錯傳をしんを

○第七候

前守お付ごこまをいつけをるるむ事

菟玖波集十四よ曰

建長の比毗沙門堂おむの下

蓮歌百詩

下

乃連弁に　くもと紅よ白よを我
とりし難白ゆもろよ

素阿法師

天形やいなをたけはせをね親みえて
とりしり

又新撰菟玖波集十八は日

つけろさきまくの白とそ人はい
たしゆ一甲よ　くまもあしぬ

人そめいこさ　とりしるに

宗砌法師

われとらむ糸の月ねわさやうよそ
とりしり

只前葉より承い事一に之るあり
爰よめいこのとらふのちり
名所の白よ

六田のよとらうさてい大和路

家國と神の七代とく〜あまそ
む前のうに

きくす〜てこそ廢もたくなれ
むのまみふお秋とまらきよ
雜のうに

きんもたれすぬるもあわれす
おぬけとりつるをさ〜らに結〜て
晴よ似きる人そき〜ら〜

たれぬれ〜浪の〜このをさ〜て
又難うと〜あ〜縁とも人〜の
付兼て〜こ〜けりきると付〜るう
お事 菟玖波集十六よ回

〜月の夜女房あま〜お〜をて抱ひ
は〜らにいろはの字をとら始よ
墨て連糸と〜るよ〜文字に
つ〜りて〜けりもれ〜

永明門院宮内郷

流泉のひわのねすことさ月れ夜よ

とゆらに

同院左京太夫

ぬれあむ物とめく人のそて

とゆら

○第八候

迷懐れむのふ意不ふ意の事

老きる人乃さそろうららん

人たまさか捨ぬるをを我出て

気等のう作と迷懐れ不ふ意なり

とゆら

すまそにうらるたよ老とうかうさ

とむらう人もなさを捨ぬて

気等れむと迷懐のふ意とある

とゆら

○第九候

下れるニ又三四の事

山のききやまのきぬらん
夕お寝よちる山さくら
きをきぬれつそりさあん
是等と二又の句作と中初人の
くらきぶくずされと
山のきをきやまなららん

夕れ種よさくらちる山
きをき都の俊さくらや
お寝よちる山さくらとや
くらきぶくずされたり

○第十候

昔と今とれ句他のきぬらん
旅人のあしあしあしあして
これいびくの句他なり

旅人の子とあつてもよき替とて
是と今の句作なり他これ準知
とて

○ 第十一候

前句末のふ文字と付られ枕詞よ
あつる句作

ほとなきよ浪風さくく蟹小舟
く山勢は川を岩こえてゆく

人よこそいづく旅人沖津風
きんたの山は秋のいろく
是等の句作と海士小舟く山勢
沖津風きんたとつけきるを義なり

○ 第十二候

付られ又文字用よきとざれども
一るのうざりに置るる句作
とつるうざりの解てこそゆけ

舟まゝさきの川辺の捨小舟
木の葉かたろく山川れ末
男磨なく峰のあしよ秋交て

○ 第十三候

一月一季一年と志する白お事
暮らまそて日や身とふれま
知るる舟おりの浪とらんそ
生れそもろやく言たり

みち人のあそよひむ月たさくさや
月のゆふくれ言れあけ平の
都うお構う次とほくここと
右初と一日と志する白から舟と一季
かり後と一年たり

○ 第十四候

當意歸妙れる乃事
ふる舟近きまのふりこ

連歌百言
三
春柳の朝氣れ煙江よ晴て
えれれ指よ舟そより来る
又月ふれふる川柳水越て

○第十五後

詩の對句れごとくよ付くるるれ事
山陰の月やうさだの所
秋の入目にかゝすなくく
越す〜峰と八重の志々雲

沖津浪月の千里よ舟出〜て

○第十六後

名所の句をととるよを近れ二様あり
ま〜と〜

春方にぬり志賀の辛倚
秋の夜れな〜の山よ撞ちりて
かぢす急のま〜さむ〜地
白川を晨の関よま〜の〜えて

○ 第十七候

前句一人のことなるを舟句の禽獸
州本よとりたしきる句れ事

さうすのほをりいこうらむむ
考のたなくもむ乃とくまうて
ゆこのなまゝに帰るぢく山
鹿そなく妻とよ世辺やぬぬらん
くたれぬしや古郷の秋

萩は風のしより勢り初らん

さねのせや人よたひとあつらん
む乃みやこの初れまの風

○ 第十八候

前句よ端的れことをいつるに舟る
句れ事

さむしつさ誰よあらん
む落る比しもぬさるあて

我ん惟よわくくむ秋のそ
萩よ夕風雲よ厂う祢

○ 第十九候

重宿よわく祢を系を付するうね事
れよとも只りぬを惟也ふらん
人よも人れうさそと笑ふや
くくろくくそわくりてそさく
たれくく一昔の人と急憶て

○ 第二十候

大さなる物よちいさねおを付らいつた
物よ大さなる物と付するうね事
歩出てえれい四方そ遠きさ
礼基よ子勝る方れ地と廣一
せくさ袂さくくを海士の子
大洒れをう塩子にあさり一そ

○ 第二十一候

前句と別のことよとりなして付
たる句お事

出たも鐘と横川の暮るくこそ
鴨舟さし捨るるあつ川き
身そなたさ物の何うさうし
山ふさの花をいく一も折てえび
鳴門ふさこころを風れとくさ
真木の皮も位うたへり秋られて

右初と横川の寺れ鐘と夜の川よ取
かすななり中と身と山吹のさお
なさよとりなしてなり後と各所
の鳴門と戸のちると取成なり

○ 第二十二後

前句れ末の五文字を付句れから
に置て意ゆら句お事

いろくれ叶とあれともむさうて

一木あられよきそる 秋の野
 雉子なく藪一陽よ羽とのりて
 あり雲蒼そそなかなれゆく
 虫の喜もよそると笑ひ又たよこて
 鴨きし宿れくさくさひし
 是等の白作もむさうて一木あられよ
 羽とのりてあり雲蒼又たよこて鴨
 きし白作意なり

○ 第二十三候

前白と他人のことなるを祇身れ
 うよとりなきそる白れ事
 いけくの人そんちうう
 山里のむよきくすむ夕まくれ
 歩わると人そち素さひし
 水あふる川邊の月よ駒と免て
 ○ 第二十四候

付るれ中の七文字と臂と志く
るれ事

うつろなく世と庭そなりゆく
われゆげん尾むりとの里かそそ
そこと難波の夕られれそ
郭公 芦れ世ひよ鳴捨て

○ 第二十五候

んの京氣れるる茶の京氣れる

ありきとくが

簾れうちのを乃春かひ
朝近さむれ白ひよ月更て
さくふく風の春さいつ近
く野山むれ古郷春さきて
右初もんの京氣なり後と伺の京氣く

○ 第二十六候

あふとりよ茶系に急むりりと付

運歌百言
十九
庭うづさる事

あくひたろく云の葉もな
うあーれこつりわうぬ末の巻よ
あらんこつりをやよこそまて
新うとさ片われ月の初秋よ

○ 第二十七候

むれるよむ免さうを付きる白お事
枕にくるむもうらめー

梅う香れ名残よまきの月あて
むとひ子お櫛とそつむ
む免うけろあうつさ毎に起出て
今年のもも化よちるころ
植置ーわう本の櫛さる初て
君来ぬれいむものこらす
いっしうて風ようくさん山櫛

○ 第二十八候

連歌百言

二十

吟の句より當座を分づき事

ふのそとをえれ秋風そふく
立田山本々れ喜葉の處をえて
のほるもくさし峰の一むし
さやうかき月の際れ夕うきと

○ 第二十九候

一句ふさつよなりてあし記る事
風乃よまきて新とる人

け句初の七文字と我身れこと
なり後の七文字と他人のこと
なり人お字を山とる及とるをれが
よらしくいなり

○ 第三十候

調よとりあさずしてふべうり付
きる白事

杞しめいそやく月れ入山

連歌百集

三

松風さうらむる花よ柳みさて
夏うもたさて何うらむらん
初もたさし白れ花に山たろし

○ 第三十一候

あらしとりのふるよ述べ懐をうりそ付
癒ううづる事

と急もきくてもあらしの山
花よ来てお糸とかなとろ忘らん

あらしの山こそくく縁なれ
雲う花うも明日やき川移ん

○ 第三十二候

前よりつる所を仕立きさるる事

惟ういとらんをむ山陰
尾の色は柳こふうく梅されて
田舎をとくおそかかきさ
くとも野の竹一むら花咲て

○第三十三後

系氣よけいさと舟きさる白お事
深山の庵よ夜うけに
枝の系よかわれる月を歯うそ
煙き川簾の里も本うられて
小舟捨とく江こそ苦ぬれ

○第三十四後

ら舞よ過現未の三舳ありきとくバ

蓬生にりりより月の清ぬらん
秋風の舟路れ未や山ならん
とくくのまといりくよ陽うらん
右袖と過去なり中と現在なり後と
未来なり

○第三十五後

と系よ舟きさる白お事
任右ときくは浦の名のこもそ

も井れ濱のさし夜乃月
神垣へうりのころあられさ
さとしくの燈さえて交る夜に

○第三十六候

そ名のきよは名考と付まらるる白お事
まのきよまらなるぬたなく山
きよさひし辰のうちよとふかす
つとたさ考をかこりさるるな

初雁のきよも人を待わひて
いかなる考そぬまなくき
夜なしくの月よつれたさの時考

○第三十七候

問答あまらるる白お事

ぬま袖をやつみ果す
恨ともをのう紀事にながして
柴の戸ととり何とる答す

峰こす風よ推の葉れる

○ 第三十八候

前白何と付てもつくべく又ささる
こともあらずまどさるにこそなる
ことを付出さるる事

ふうれしき春と来より
あひよあふ影花香れ柿咲て
にほろよのさる宵ぬの月

春の夜れ柳なり小舟喜文て

○ 第三十九候

春葉姿をばかこころになりてんを
ふろく付さるる事

さく竹のたさや人のうり衣
一夜とあやめ花の下ふ
むさよ文よとらうらこもなり
若代のすけといりよ喜つれて

さほ姫のうらふ山もまうけて
かどめといまの峰のまうる
むきよの神はす急もいのん
いく夜もあゝぬ旅ねの竹まう
吉野山ニきひまよなりにり
年のうちよりととむくへて
舟こく浦とられをおれり
かゝ玉のとうまさらなまおほえて

朝おあゝのまて夜とあうり
お籠のうちとあひやまゝん紋を
馬ねとらさて人さそくなり
ちや川の岸はあられるわう舟
右方一白とかり衣ととて方二白と
うそらさととて方三白とわらう
とて方四白と神よいのりととて
方五白と吉野ととて方六白と舟と

とて才七白と夜分ととて才八白
と馬ととて付きとろなり

○第四十候

十文字付といふお事

長深よすめる雲の川水
蛙なく五夜の月れ新ふあて
都ともかたにすめる奥山
立出ておたるむれい雲か

枯る蓬と露ものころと

引捨て麻干ちとを夏れ日と

○第四十一候

引遠付といふお事

山よてもきこうさの夕暮
浦人とも何とさくらん松の風

○第四十二候

首とれといふお事

なうの浅茅の原よりりて
けるころもうの浅茅とらつづらざら
かりをを作らうて
なうの里と浅茅にうつもれて
とつらつりゆくばらうらなるなり
他これよりあふる

○ 第四十三候

連弁親と疎とれ事

氷のうへは浪そきくらなる
さゆる夜は月のうけのむとと記
くも果もあつぬむの中
和田の原よせてらうる津津浪
右初と親とたり後と疎とたり
親とへ伺のたぐとめくして
前とれ付合よあつみきるなり
疎とら前とれ姿伺とかうて只

連弁親

連弁親

ひとよらとよめて付なりきるなり

○第四十四候

流随放逆の四道付様此事

春さるる水と氷解りり

春うひむ涼苔の小川を流れて

時の春よひさるるをそるる西のそ

もろこしすそのまれり川風

徒よりとむ有明の月

春れ春のむの白ひに山をえて

なく春も哀とやらん谷の庵

ゆるり春あつたむの下陰

右方一と流なり方二と随なり

方三と放なり方四と逆なりけ

白れ趣とよくくん坊と白ごとし

んを轉じてねなごるのなごるる

よ付らるべき事なり

○ 第四十五候

連奇真艸行の之辨お事

川をさひーさすーのま
 種をさる若お瑤乃れそめて
 わ身のおとさうにたもくす
 園よふる君よあられまなくて
 あーたの君に初をころそとく
 となれきるこ甲のわりの里れ名や

右初と真なり申と行なり後と
 艸なり真とん同うけあひきるを
 い行とん大さよりあひきるをとい
 艸とん趣斗を付きるといふなり

○ 第四十六候

連奇有文無文の白辨お事

何よころをころともなり
 かさるぬ繪鳴う張と名のこよそ

なり免とる繪傳う強れ朝りも
右初の付向と有文の作意なり次
れも無文の向作なり前向う向と
ともかゝるといふにこそ免ぬとま
名のともてなご其文あるこそまなり
又ながめとる繪傳う強の景氣何よ
ふとら向ともいふん勇なく〜
とドまとりども其文なき所なり

○ 第四十七候

意の向れ本意不本意乃事
かた〜と〜といふ人のまよひをて
秋とや人のおもひの〜らん
是等の向と意れ本意〜とあ〜と
なり意の本意といふと向れぬと
うら〜別〜とあ〜とい名のまよひを
い〜い〜の書よら〜事と歌〜い〜く

さましくはらむつくささとなきとらる
なり人よあつらるる居うよとらるる不
意なりは事と所くよあれども又
こゝもものさるものなり

○ 第四十八候

字餘りの白ち口よきをさるる居よ初ん
の人ととぶうずあられども字あまの
乃るといふんとあまうがみ字とあま

時とくとととぶー七字をあまよと時と
みとくとととぶー七字ととと

あさの色やさされあつらく今朝の朝
雁はなく宵明の月よ起出て
きみの戸やもも富州のむさうり
石初とくとなり申とみとなり後とと
みなり

○ 第四十九候

連奇輪廻の事、四時時變、山海
艸木人倫鳥獸等、此等物より、く
も惟と免ぐ、して毎句あゝぬ、こゝへ
うつり、めてゆく、なうに、こゝへ、句と付
さぐる、よよりて、ゆく、なうなる、事と
いひ、物と、よりの、なり、思案、を用、き、る
處、一付、模の、事、と、新式、よ、ん、え、き、り

○ 第 五 十 候

お合さ、ら、し、文字、お、事、て、に、こ、し、ー、や
ぬ、等、の、字、な、り、是、等、の、文、字、韻、よ、あ、る
時、も、前、後、あ、ら、れ、折、合、よ、な、る、か、り、又
と、て、の、だ、よ、の、う、へ、の、等、と、お、合、よ、さ、し、い
づ、る、よ、し、産、夜、よ、ん、え、き、り

○ 第 五 十 一 候

連奇解用の事、凡解用、此、抄、法、あ
る、物、い、み、な、と、句、つ、く、べ、ー、と、句、つ

通歌百言
あんなあめれ舩用なりそとくば浪よ
浦と付て赤水などら付るるす
用の中に舩へぎくるゆなり水
多舟くーなどれ舩用の舟なる物
よて付べー舩の中へ用と一ぎつる
事も同前舩用く用舩くあるむら
舩く用用く舩ふつくく登ー是を
言抄の説なり

○ 第百十二候

連奇のめ通にほーとつども其申
よえうんで学ぐんとくべ宗祇紹巴
の風骨と習よべー白作をなをに
しそきけたうー歯まなるるも
む繁なるるもそとてそ業やさそく
して人の耳よさこーやそーある
人のいらく宗祇宗長兼載紹巴の

通歌百言

三十四

連歌のやまをうらやまてあつるを
とぞ彼よまゝるべし眼筋のことよそ
作意免づるしん事をとりよら先等
れ人達なり

○ 第五十三後

連歌のやまをうらやまてあつるを
とぞ彼よまゝるべし眼筋のことよそ
作意免づるしん事をとりよら先等
れ人達なり

ずとらん中傳るなりまがみ
才一よ海さんのこもりて詞やさしく
氣をかき新をよしとやをかりは
季の祭ると菟取波集りも新撰
菟取波りも祭ると帳りもあまのあり
るが四季二百題りもあまのこのせきり
又連歌塵袋よ正月より十二月迄の
月次れ祭るとん坊あつるの事あり

ひくそそてえろる巻一

○ 第又十四候

連奇付合の事ハ趣向と宗長の
兩夜ハ記ほど委しと物と外とナ
けおと宗祇も連奇の奥義といお
なしと么百二十七ふありひくそそ
熟覽ととぶし至要抄も半と兩夜の
記と書字して數箇條となつたり

○ 第又十五候

付られ付う付ぬくと委しと空々議
志をさる事と大原三吟よれよ
ものなし彼三吟と宗祇宗長基佐
なりいづれも當時よ名を記ぬ道
きり一の翁をと出してそれ三人
ともよ付てたぐひよしとありと回
答志をさる書なり四十番ありひく

さうらう時ととのづらう舟のれまよ
通達ととる

○ 第五十六後

付合案どるうの事まが前白と
うくえあせて後白と考ふべし白と
出さん時は前二白と再三吟じ合
てそのうちに我付白と吟じ合て
出とべしとるうざう時ととるれ

論廻とあやまるものなり又よこる斗
とせんとあひんせしなりことにより
ていうもさううたもるも案しとるべし

○ 第五十七後

連弁のう弁とあどてりべ十弁あり
幽玄弁と高弁有ん弁等之別し
りべ二十弁あり行雲弁澄海弁
不明弁を繁弁写古弁景曲弁等

なり委しくハ至要抄よりえきり又
宗祇の伝解秘傳抄より新儀八十
解とせり陰の解陽の解等なり

○第五十八條

和弁連弁は俳諧あり和弁は俳諧と
古今集十九よりあり連弁の俳諧は菟
取波集十九よりあり予が前よりふ
ところの二十六の選是なりと志くれ

ども芭蕉家ハ俳諧よりありとてその
ゆへハ俳諧十論抄中巻に曰古菟
取波といふと連弁の集なり其中
ハ救済の俳諧とて

歎對きるる曾我ハ殿原

十郎ウカハほくと不郎でま

とありむうハこれらの不化と
俳諧とて書ありむれハ若さ者とも

うらうらうらうらわけて古風は老人は歌
ひくむとりり是を号ふ也一

○ 第五十九候

連歌の案白と俳諧は案白と一字
違ひは事十論衆議は曰む一
芭蕉翁連歌師北野の宗通能順は
會して白をとたまふに能順の白は
秋風は薄吹ちる夕月う那

とあり芭蕉翁は曰けり秋風よとあは
らんよと俳諧なるべしと案にあ
て能順連歌のわらあふと称せしれ
とて連歌は半余葉は情をふく
俳諧は物の姿をわらひし情を
其姿よふかふなり姿を先よ
まは蕉門の法基なりとり又
ある人のいづく連歌と俳諧と一字

の入達ひよてわううと事ありきと
 渡し場の船とや人れまらぬらん
 とあれば連字なり
 渡し場の人とや船のまらぬらん
 とすれば継借なりとらり
 案ずるに連字と實情をそとび継
 借と虚よもつて姿を先とさる
 ぬらんを

○ 第六十條

案ずるに切字よーの字と用ゆる事
 連字と継借とは異りあり連字
 よる現在のーの字未來れーの字
 と切字よ用るなり過をのー切字と
 切字に用ひざるなり現在のー切字
 と亦ら向ーの字ともなり現在
 のーとまーとー源ー等の類

未来のーとわ〜ど〜み〜ど〜た〜ま〜
等の類なり過去のーとえーやー
有ー等の類なり併借より過去の
至のーと切字とせざるなり未来の
ーと切字とせざるなり芭蕉云々

○第六十一候

連字よと雑の繋るなり併借よ
と芭蕉れ繋るに曰

からな〜い杖つさ坂と馬馬哉

東蒼お繋るよ曰

予書より軍書よかた〜吉野山
等の類と雑の繋るなり志るに云
仍お連字の繋るに

楯の葉お〜く〜とる嵐うぬ

とよと繋る性よと秋の部へのせ
きり春衣よと云仍お繋るよ雑

よ治定なりとりみ是等の事と又
に明近よ尋ぬる

○第六十二候

連字よと哉よかよふよてとありと
りどもよて苗りの祭るはこれなり
かたよにうよふよてと哉よ二句嬌ふと
りよ事彦彦衣よんえまより俳諧よと
よてありは祭るあり芭蕉の祭るよ曰

幸崎の松と花より臘よて

又千代が祭るよ曰

を白とどららの病れなまけよて
等お類なり

○第六十三候

連字よと千代仙の式なり千代仙と
二折四面二巻四月二十六日よて
俳諧の式く芭蕉家れ俳諧よと二

を二月とさる事 古今抄にさるる
志るよす仙連すありとりよ人あり
業むるに祭の状まの部又曰

二十六人す仙法樂祭の所をに
宗長法師

を殿すのりもやほのくわうれう
とあるとす仙連すは祭るとれり
得るなるべし宗長の祭るとは廿六す

仙へ法樂のりもてす仙連すは祭
るよとありざるなり

○ 第六十四後

枕を系とりよと古今集の序よりたこ
すて和奇りも連すも盛りに用ひ
さるれり能器も用ひざる事と
和文鑑才八又曰むえたまのよるは枕
詞とさそしり一のきとまなれり

なべての人お用よと云々ねと今も
麩桶のなだを食と連奇師なとと
用ゆるなる一とつり

○第六十五候

連平の意れるよと男色の沙汰と
これなり一 懋徳の意する男色あり
續五論は曰寺の美流とつひ山お
若流といふと三井いえれ徳のれも

これ人なる一とつり又と貞徳の
獨吟百韻は曰

御室は僧や藤糸ふらん

順政と十六おはさつりにて

とつり業ぶるは但馬守順政と御
室をさちなり四と十六といふ身
急なるんを

○第六十六候

連平百韻

四十一

連歌百詠
官僧と連字とを以てあそぶべし
俳諧とおもふ處うづ俳諧とみかよ
似合ざる作業なりその由と芭蕉
の句に曰

登風馬れ尿つく花も

東荅おるよ曰

ふんごうようさ名おまや意の山
とりり是等の句所とるるに官僧の

とよふよる不相應の事なり

○第六十七候

連字より出きる俳諧と山崎宗鑑
を始として貞徳貞室宗因等なり
凡二百年お間の俳諧と連字よきを
かゝど芭蕉よりのち言筈人篇れ
字論とにこして言筈お俳諧と
用いずして人篇の俳諧となるなり

芭蕉の云我家に俳諧と史記の索
隠よりよところの俳諧れ字なりけ
るよ俳諧よ古人なりと云云爰よれ
おく連奇と俳諧と天地懸隔なり

○ 第六十八候

連奇の席まで誹言くこと嬌ふと
宗檻より二百余年の間れ俳諧と
芭蕉家れ俳諧と姿情とありて

連俳乃ららめとともあるよ誹言連語の
沙汰より及むすけおに為辨抄中巻
二回貞徳も宗因も附合と連奇の
情とともひて一字も俳諧の姿よあ
らと誹言なりとも連奇なれはその
比れ吟味とむなり今の俳諧よと
誹言連語の沙汰なりとあり

○ 第六十九候

連字の俳偕も菟牧波集よのよ
ところなりえるよ和漢文操より
蓮二房が連俳互照の序に曰

檜のうめをみやほくくさす

とりへ連字れ俳偕なり

時をさくせ歌よりや若楓

とりへ俳偕の連字なりとり

案ぶるよ人篇の俳偕と言篇れ俳

偕への虚實姿情れ異りあれへ雷同
とぶくくさるものなり

○ 第七十候

百韻連字の式も四折八面四を八月
とせども近代も名跡の裏れ月と
略するゆへ七月なり他の季れ
月と短るれ月とつゞけていせ
ざるなり秋の月とるれ月と

七面つゞけてもとる事なり又初
折の裏れらど免二句も同韻同
字も表ハるれごとく嫌ふといふ
人あり又神祇教述懐く舊
等のこと嫌ふなり同字同韻と
るるしうずすとみ人あり又
月の新節りれ事しゆ節りれ事
も節りる教れ事異説あり

連歌百詠

四十七

其名の宗通れ表にまるとる

○ 第七十一候

百韻連系よと名張の裏れ月
と略と事近比のなると承久
とも時代も分りなると志るに
俳諧古今抄卷二も百韻よ四
折八面四を八月の右式の名月な
れと名張の裏とをよせへと

連歌百詠

四十八

連歌百詠
宗祇の比よ勅件ありて四巻七
月の定式とともなれりとりり交
は尋ぬる一

○ 第七十二條

連字を嫌の事と新式よの事
所なり又前哲れ指南奇十二首
あり定よの事よのなり

國名所 神祇教意を考

述懐く舊表よとせす
衣季や竹田の糸海夏後
月松栴煙七白よ
字さりとてみるさりなれとかさ
あれる文字と二白ととれ
植物とみるさりなれと叶と本と
竹よふれハ三白ととれ
みるさりの神祇教意を考

衣類夜分に縁を述べ懐
 居所をみなみるをなれと信おなと
 うそさよりいささらふ歩越
 之白さる物とあり抱得年三物
 名所竹本お中と志る魚一
 生類とみるさりなれとるど奥
 む一 獣の中と之白よ
 狩や網つりお糸なと生類よ

かれるおに嫌ふうちこ一
 むの白よ定産とあれと獨吟ハ
 前後よよりてえさうらひせよ
 従ふや祈禱めささる連奇にハ
 禁忌不吉れ伺せぬなり
 切字とら一そ名なれよけすなり
 ひより卯ささるや字もな一

案どるよは指南平お中よ煙七白

よとりども産衣よ七るとみるとれ
み悦あり當時とみるよりて律耳物よ
とるとりよを用るなり又叶と本と行
よかうれいとりよと竹の字ハ篠は字なる
産一産衣よ竹と叶よも本よも二と
なり志のと叶よもとるなりとりり
せ言抄よとさうとと志の三たがう本
よととる嫌よべいとりり志うれが

竹の字ハ字誤ととえきなり又切字の
指南と大略なるべし至要抄よ又十
種の切字れ例をとせり其申に
當時用いざるもこれあり亦初ん後
んの人ハ差別よよりて用捨あるも
これあり産さかゆよ又よと
のせざるなり

○ 第七十三候

呼子多る百千多る稲負多る白多るけ四
多ると連字よと群歌とぐーとりふ
事一周桂の鏡なりと彦衣よとえ
きり前通より承けよと呼子の
多る百子おるとの字を入れてとれが
くもーかゝむととなり又よ其席の
宗匠に尋ぬ處ー

○ 第七十四後

彦衣と宗匠達も信用とるもの
なれども異説ありふーと一概に取
用ひぐー又異説なりとりども
近年用ひざることもありそとへが
とゆ留りの干るなどよ一もあるべと
りども近年と百韻にもとるなり
又上の白れ物をありよらーかゝずと
りども當時とえらりざるもなり

通歌百言
いなり産衣の中れ異鏡未変用捨
の事ち皆具席その時れ宗通の
らよまうせて卯より詳論をなす
庵か〜む

○ 第七十六候

とゆありの白お事一至要抄よとゆ
ありと五音れ才三の
うくすつぬふじゆる

の字なきていあ〜ずとりみて一とよ
例台とせりえもよ雨夜れ記よ回
曇いれゆいといねともとゆ
とりり案どるよけとゆありの白
よらみ音の才三お文字なり〜文よ
ぬ通に尋ぬ庵一

○ 第七十六候

ぬ字の事てありとありぬありとよ

てありらんありつゝありもゆあり
うねあり等ねるの事一と至要抄
よ一く例るをゆ一て委一く其
をもじさとあるせりひらさそる
奄一

○ 第七十七候

畢ぬ不のぬお事一畢ぬも察るれ
切字にたるなり不れぬも切字よ

なうざるなりぬの字れ下よるれ字の
そいでまゆるのをらんぬたりるお
字の育れぬも不のぬたりとある
奄一

○ 第七十八候

かなう一さとりよをまよるるりく
ありあゆとつな一ひとらふらあふら
ろなり観をかた一ひとらふらあふら

連歌百集

五十四

くるんなりみとくたしむとらふと
情をかくるそらなりうらかたし
とらふもさびし記ころもあり赤
朽もあつさふもあふなり又哀と
らふも是は準知を癒し

○ 第七十九候

あゆせんとりふえ葉もよある時と
いうよせんなり下にある時わい

せんなり春衣よえきりたどんが
ふあさ秋の秘えをいうせん
急路ももまを園をはいうせん
寒くなるあしらの風をいうせん
いうよせん花とりそあつ峰の音
いうよせんことのとつたのそのま
えくるに菟玖波集第九よ

よも一もあつぬめといふよせん
新撰菟玖波才九才十四才十七よ

身とてのちもあつやいよせん
いうせんなまにちいさななれ
ためいあつじとさていよよせん

老葉才六才七よ

一夜のまことなをといふよせん
なをといふよせん

とあり是等の事と文よ明通に尋ね

○ 第八十候

付合小鏡も徳ととと事とと
な一宗牧の連才手引れ系よらあ
まこの才あり又名所小鏡も徳と
くなり神祇才也よ名所の才あま
あり手引れ系と才也ととひよさ
甚奇れ意とえて後よ付合を考ふ

奄一隨系集拾巻集竹馬集満
目集ともよ付合の事一と志る一
ある書なりととりども小鏡よと
及ばざるなり

○ 第百八十一候

本奇能事は事一本奇といふも前
の後の引合て事の意ととりて
とることなり能事といふもさるる

づりよ事は意と用ることなり新式
よ北野よ郭よの事と出て委しく
註せるごとし

○ 第百八十二候

等類よ似て等類にあつざる事
能因法師の事よ曰
都よい辰ともよま一と
秋風そ吹白河乃 関

頼政卿の奇よ曰

都よまきしききまよてこころも

おまよちり志く白川の園

又順徳院沖奇よ曰

ちくま川まきり水と流にりり

消ていくくの障乃白雪

ん教僧初の祭白よ曰

水まよてえて幾日乃まきり

とりの案をもよひ奇祭白はまの能
園の奇と初ともよく遠くをあれ
きもころなり頼政の奇とまきり
紅葉白川の色立の奇なり沖製
の奇とまきり水と流にりり水
は晴なりん教の祭白と水まよ
とら水の次めなり是等お祭の白作
りが四季題の中よあまよあり依

てい事を愛よのをもるものなり

○ 第八十三候

連奇よは花月言れ之程とことよ
称美とる事なり百韻連奇の時
とむの句と仕きる作者ハその巻よ
さくくと斟酌とぶ——月れ句と仕
きる作者ハそのおよむの句言れ句
と斟酌とぶ——答句と仕きる作者ハ

花月言どもに斟酌よ及ぶずとら
産衣よとえきり言れ句と仕きる
作者の事と沙汰なり——とらども
そのまゝあるべ——千句連奇の時
よも花月言乃之程と別よ式ある
事なり文に明通よ尋ぬべ——

○ 第八十四候

百韻連奇の時と初二三はおの表

よりのまゝ七本九州十秋といふ名目あり
て是を過て四のめよりまゝと出へ八
のめよ本と出へ十のめに州と出へ
十一のめよ秋と出せば皆十とるめれを
よさるるゆへなりまゝと本と州といふを
きゝず秋といひたゝず是を初
ん乃人の意のた免なり

○ 第八十五候

四十四連^ヨ弁と百韻四折の中れ二折
と除て初後の二折と合せするもの
なりが百韻よ四の物と四十四るれ
内よ四ありてもるゝかゝずといふ
人あり又百韻よ四の物と四十四連
弁よと二なりといふ人あり是等
の事ら其意その時れ宗通乃指
南よまのを金一

○ 第八十六候

一折二折四十四百韻千の万の連奇
乃事一折連奇四十四連奇と新撰
菟玖波祭の状よえきり二折連
奇と菟玖波集初学抄にえきり
祭の状よと千の万のれ連奇
にやー新古あ菟玖波よと百韻
連奇にやー業ぶるにびりーハ千

の万のれ連奇盛りよにこなれ
近年と百韻連奇にやふーて
千の万のれ連奇よと千ー予も千
の連奇の席よと度くまりー
とも万の連奇に會ーといまぶ
席にすい鳴呼惜哉

○ 第八十七候

和漢連のれ事と新古あ菟玖波

連歌百詠
ありとくども當時と具沙汰
なすきくく二とをとおさん

燈 殘 孤 客 床 新

よもきくぬれあることいなるん

林 深 聽 夜 鳥 同

ほのけとくなきやめぬらん

道 義 富 無 驕 古

多とふれはまのしき時もつらと

成 市 在 門 前 同

むのある宿よと人れ集ありて

予がくろこれ知漢連るよ

如 實 知 自 心

佛こそ我身とたもくより新なるて

○ 第八十八候

本式連奇の事と菟取波集二十よ
も新式本式あひわうれなる二千台

連歌百詠

連弁よとあり新撰菟玖波の序
よも本式新式のむ移とらんよと
あり奈白怪まれ部よも宗祇獨吟
の本式連弁よとあれども當時よ
新式連弁のよもして本式れ沙汰よ
これなすし本式連弁よと初折の表の
十のよして名残れ表よと六のよなり
賦物れ取をうたよどももるよとよと

丁寧なる事よと承い斗なり兼載の連
弁本式よと去嫌の十三箇條よとえきり

○ 第八十九條

百韻連弁よと照のうたよとず字あり
才よとてあり才よとらんありの
通式なりよとつども照のうたよと
よとて文字ありぶ才よとらんあり才
よとてありよとるよとて文字あり合

ゆなり又祭るう那ありなすべ方
之とよてありにせぬなりよそ
哉よかよふあよ亦祭るよ月次の
月あゝば其表よとよ明ささるなり
面ハるれ内と同字を嫌ふあなり
気等れ事と産衣もええたれ
どもそこまゝ遠ふ所ありま
愈

○ 第九十候

祭る服方之よと雜れ白なり夏冬
の祭るなりべ方之と他の季よても
るるかゝらず又祝を等れ連弁に
之物とやて之るさることあり其時
と方之まて同季を用ゆべり先
先達より承けこと也爰よあると
なり又よ尋ぬ愈

○ 第九十一候

むの巻の白は時と裏の十三の白めは様
をとるなり又むのある面よりさく
らとせぬなり様のをと仕する作
者とその巻はむの白と斟破さぐ
とと春衣よえきり

○ 第九十二候

初折の裏れは白めは急の白とゆと

事待兼急とりよて嫌ふ人あり又
まらうぬると急の情なれはる
かゞどとりよ人ありそ席の時宜
に随ふべし又急秋急後急よ
存方よ急の急のある事一春衣よえ
えきり

○ 第九十三候

月のたきと秋と素秋とやせせぬ

事なり春夜よも時よもいづれと
しどもよかゝるなることしり又
秋意と一るよそをうづるなりを
とくば意れははつゝさきなる時よめる
めよ秋意と付れはる敷つゆりきる
あよ一るよそをくべし是と嫌ふ
なり四るめより秋意と付れを秋
意二るづくあよよりしきなり又

あげらるよと二るよそもせざる事と
春夜よもえきり

○ 第九十四候

あこーとさくらみと二るをとらぬ
異なれどもむると去所と同ト事
なりけあに赤城と嫌ふおと付てい
るよーかゝらず二るをの物と付るも
さくらみとりみ鏡あり葉どるよも

まふふと隠ふ鏡をうらんを少ふ
と赤紙さらふものも付白も嫌ふお
もあり二白去れものも付てとと
物もありそとくバ櫓焼よ空と月代
よ新の字も夜よ明の字永日よ昔
お字宿よ家の字煙よ薪漬よ袖の
月老よ齡い思急よとぐうーさ日
のちるよ新時ふ日れ入よ又時ふ等と

付るもさらふ赤紙も嫌ふなり又月次
の月よ明名所よ赤方等と付てハ
とるなり離れてと二白去なり新
式よも産衣よもとえそり又よ明
通よ尋ぬ登ー

○ 第九十五候

白敷つとさるうの事一と秋れ白と
とるよりみる近其冬猿神紙教

述懐山類水邊居所等れると一より
二より近人倫名所衣類障物等れる
と一より二より近植物生類等れる
と一より或と二より近或二より近雜
れると一より二より近意れると二
より三より近きるなり志うあれども
初人の人よりとりひつえずしてそ
るへうよきべー

○ 第九十六候

連奇至要抄と二百十四箇條よかき
わけてむ委しき書なり其中に
曰宗通の雜談よ上平れ連奇と他
人乃中よさざごとく下平のと親類
の中悪あがことし 云

遠き山よりやむとさくらん
産きし根の極あられて

時は風舟よのとろろ和田の原
けあると思惟されの遠山よ倉原と
りいむさくよさくらぬられて山よ
き根いつれもえんをれの親類よ
やあらん又風のとうたる和田の系
と付てきいつれもえんをれとも
ころかきいうるきくれの他人れ
申よきよやあらんとねあくまきり

又宗長の云下半れらるさきうらごもり
の物りみぐことと云ねうーくて
きくとあふに

風も志のうらうらかきむは
あもろよらねよりむやあぬらん
むやあらんといらんをてあもろよ
かきくき用の事とねあくりいさる
らごもねる人れきけむやあらん

とつるよむるーからんけろろまこ
とに毎るある事ーなり

又紹巴の云作意とつるよむる
天竺唐土のきささうひよもあらず
佛教神るよもなくいさく目のま
れ事にい文字ひとふまののかえ
すめはていたとく

まよりて涼ーさまする本陰哉

といん繁るよこのほうれさたのさ
あてうひなり是と

まよりて涼ーさまする本陰哉

と仕けいめりらーさ作意よてい

又八月十又夜の祭るよ

雲を方も月れうくもこよひ哉

雲を方も月れうくもこよひ哉
月よからくもとつるさやうたるも

まゝにして作意をいへる事よ
他准えといひ

案どるよ是等れろを思惟して案
の付合る作意の大旨をあるを

○第九十七候

連歌賦物の事一是を宗匠家の傳
授物よして秘事なれば家よち
略していへずあるれども連歌賦

物抄といふもの一冊流布して賦物の
取處う忌をう古今お遠れ事など
まぐであらまゝとあるとといへども傳
授なる人もあれごとくべし其奥
書ハ新式の初学抄とそのまゝ字
墨のまゝなり塵袋よもんえきり

○第九十八候

連歌會席の事まぐ其の席よ

のぞきてらんをまげ免形儀をき
まぐしと雜候も笑等まぐか
白とひまぐおとぐかどと連弁と思ひ
とむも風月の色香にそみらと千
變万化よめぐととりども人の目
またち耳またちをまげくまら
おしと隣をれ坊よちのぬをうに
つちむべー白と出と時あこりへこ

やくべかぐず満座まで難白禁る等
せぬをうよんぐけ物ごとにきをんと
なると事なり

○ 第九十九候

執筆用急れ事まげ上座一礼
て席よつくべー貴人の席なるべ
安座まぐかぐず平人の席なるべ
らるかぐず遅系の人よ連弁披

連歌百詠
もあさる時と平人あつて當るよりあ
紙まで披露さるべし貴人ごとく一面
も又とらぐて免よりも時宜は随ふべし
懐帑の面油断なくむ月暮れある
所等足合て指合とよく吟味を
盡し執筆と菓子くふべからず
茶のむべからず連歌をぶくらず
事つてまむ盡し

○ 第百後

祝言連奇は事宗祇のま祝言のあはる
より那と免いんは服乃くめれこ
とん志さしまの乃あそくあうの事
さすしさあうり那しさとよまつけ
らるるああうり赤わさこのとまりよ
うれしさをく免いんとく那しさと
文字なりしめてあしきまて玉柳を

とひふえ葉もろくさなり玉やな
ことひよもよまれゆいなり是よて
よろのふうくさなりとりり

紹巴のえ後玄れ時察る服才三の白
たよは仕様の事むさくむ免柳
松竹むとすのむひく免くむむ
くねねそーむとくそむる小松ふ
る木のめきん美葉志ける木玉乃砌

玉く庭玉とこれまきのを覺くさな
る物のつましく門乃のゆさたえやら
ぬ里くれゆさうい駒をちちをく新産
明方の雲等よろくくい夕露ゆい香
香消露るるむちる木の葉るる等
らあしくいなりとりり

葉むるよ熱どて禁忌不吉れえ美ふせ
ぬあうにっしむ色さ事なり

右に百候と初ふれもの、需よ
應じて筆記する所あり愚老が
婆心かく乃ごとと一ニと子息を
察す處一云云

白雲堂無相

追加

一又音の事

牙音	齒音	唇音	舌音	喉音
あ	い	う	へ	を
か	き	く	け	こ
さ	し	す	せ	そ
た	ち	つ	て	と
な	に	ぬ	ね	の

は ひ ふ へ ほ
 ま み じ め も
 や い ゆ え よ
 ら り る れ ろ
 わ お う 急 ね
 一 らりるれろれ文字の上よあるもの
 と夢にふむなりきとく
 らうがそーくらくたけてるなり

アモラのきくぶつうたんのむ等なり
 るいひらむむのらら等なり
 れいなるぬれんよの等なり
 ろくのうくろくろく等なり
 右履うきよよむるたどつ初ん
 乃人よと似合ざるものなる
 産後にんえきり
 一へえ急の三字指南齊は事

〇いかにかきまけりてゑもあへんまうりてゑに
ちかぢかゝるゑやゑど一のゑもめん
ゑえゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ
ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ
ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ
かゝゑちちちちちちちちちち

案びゑのよけおもいおひほをねは
わうふ等の指南、齊もある處一

委しき事と定家卿の假名文字
遣等にアえきり

一てにし指南、齊仕事

ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

案びゑのよにぞとらゑ時々下とよと

ゑゑちなり上にこそとらゑ時々下と

れとゑゑちなり上にたゑひきやとらゑ

時と下とをふとあるなりよと
りよ時と下とをふとあるなりよとにや
とりよ時と下とをふとあるなりよ
をふつなりとあるなり

一ム教の云連奇れるよ七悪あり一よ
大酒二よ睡眠三よ雜徒四よ徳徳
又よ無教寄六よ子口七よ徳人
なりとあり

案ぶるに初のみとあるべし後れ
二とを別あるべし事なり

一宗祇の云連奇の初よみ字と置事
地水火風空れみ形なり又箇の賦
物を定る事五躰五輪即是我なり
面を八句に定る事と阿鑊叫よ
阿毘羅叫文と引合ふめて是と
号す裏と十四よ定る事七覺と

六根又執を添てかくのこころく名付
 るたより二この帟は表裏と古八白
 よ定る事 法花古八品よ又衆生の
 表指れ節と含す一むなりたよ
 現世後生に用ゆ又四の帟は表と
 十四よたの事一十二因縁又女神
 男神と加てそと名つく裏と八白
 よとる事一仁王般若よ八偈の文

この事あり万民をとりて其難
 とのうるといふれよよりそとた
 こふ事かくのこととつり
 案どるよ賤物よ百韻四折八面
 の配當と紙公其帟よ平んでその
 時れろろよまうせて一往の配立な
 ら配當とまうくなられば一概よ局
 情とくかゝざる事なり

一宗長の云連歌とんとうく本として
 虚空をむくくんの月と種となく
 けりよまゝのつらぬりきとくんの
 雲とけし妄念とや免なとた
 ともゆくとにくくと思ふす悪ん
 と捨る事一きくか菩提乃種なり
 とりり

案ずるに連歌と儒佛神の之る

二通達とるれ作業なるべし執意
 とくかす

一和漢文操才云連俳歌仙行といふ
 物あり連歌の所用とあらずと
 いへども名通達の仕るることゆへ
 け幣のあるにまうせて爰に字一
 墨ののちり

連俳歌仙行

正珍
 二 蓮
 二 純
 二 珍
 二 由
 二 純

二 通夜志^{サチ}しむよの神の宮もあは
 二 け身れ幸^{サチ}はら川と待^{サチ}んむ
 二 幸^{サチ}とては光陰の美も射つくして
 二 学^{サチ}ひれ窓の音もさむき
 二 相膳^{サチ}よ新友^{サチ}あはれをれ入
 二 豆^{サチ}間志^{サチ}ハ一の旗乃やま^{サチ}ひ
 二 俊^{サチ}船もころくく^{サチ}り風^{サチ}吹
 二 小貝^{サチ}ひろみ^{サチ}や波^{サチ}の川^{サチ}あ^{サチ}と
 二 純
 二 由
 二 珍
 二 二
 二 純

ねとととて 糧よなる 夕月夜 二
 うら枯よるる 山の 高萱
 時^ニたのすきよまうひー 秋の霜
 物寐とさせぬ 親喜の下
 鳴えーいつら 村かきと
 ね^カ厩よせりき 國^カ智のふね
 えこくこーふとさそと 哀よて
 質屋の内儀きくも 信とほや
 由 純 二 珍 由 純 珍 二

明言よ 宿てあふくむ 免の宮 珍
 鮎乃加 滅れ一子 相傳 二
 咲はと 告やる友の むよ来て 純
 蜂の 巢立とあを と約束 由
 月と 入野の 日新れあさうよ 珍
 やいととさうい 候よつとや 吟ふ 二
 縫ふ 汁のまん中へ 来て横たさう 由
 といより ぬれと人 につれなり 純

塵取も帯もそとよ物たゆひ
しやーめーる袖のたちみれ
ぬやとり暖簾とるれは茨本屋
ひくーなうくは御代ゆさなり
純 由 珍 二

作者列傳

正珍ハ伊勢ノ山田ニ師範トス連歌
ハ里村家ニ通祿セリ風義ハ宗祇ノ

方角ニ遊ヘル隠逸人ナリ光純ハ其
門ノ高弟ナリ博ク孔門ノ詩書ニ通
シテ師職ヲ家トセリ由ハ同ク山
田ノ産ニシテ當時ニ俳諧ノ名匠タ
リとりとり作者傳々略して要を
とり字一置のゝ蓮ニ々文操の作
者たるゆへに列傳の中よへのせざる
なり

文政三年
初春既望



文政三年

初春既望

